
恋姫物語～神に恵まれし者～

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫物語～神に恵まれし者～

【Zコード】

Z3916Y

【作者名】

暁

【あらすじ】

何気ない日常を過ぎて居た主人公が突然なにもない真っ白な空間に立つていた

そして神様から告げられた事とは……

作者は初心者です?
駄文になるかもしぬれますがよろしくお願いします

『『えられし力は破滅を呼ぶか奇跡を呼ぶか（前書き）

初めて書きます。

至らぬ点もあると思いますがよろしくお願いします。

『えられし力は破滅を呼ぶか奇跡を呼ぶか

此處は何処だ……

周りを見渡すが辺り一面真っ白な空間ばかりだ

「ええ～～と」

「たしか俺は部屋で寝ていはずたよな？」

よし行動を振り返ろ～

まず高校から帰ってきて道場で稽古して飯食つて少し運動して風呂に入つて読書して普通に寝たよな

「うん……やつぱり訳がわからない

しばらく考え込んでいると後ろに何か気配がしたので向いてみると

そこには土下座をしている真っ白な服を着た老人がいた……

「えつと～～どちら様ですか？」

『本当にすみませんでした～～～～～～～～～～』

「いや……こきなり謝られても困るんだが？」

『それもわうじゅな……とつあえず名乗るがの……僕は神様じゅ』

「は？」

『だから神様じゅうと言つておひつが』

「何故に？そして此処はどこのなんだ？」

『お主にやつて貰いたい事があつての、そして此処は天界じゅう』

「天界？なにそれ俺死んだの？」

『まあ、確かにお主には死んで貰つたんじゅうが、だから謝つたのじや』

「勝手に殺すなよ
まあそうなつたらしようがないし
アフターケアちゃんとしてくれよ」

『その辺は大丈夫じゅうこちらから呼び立ててしまつたから
家族へのフォローはちゃんとするわい』

「それで俺に何して欲しいの？」

『実はのお主にはある外史の世界に行つてほしーのじゅう』

「外史つていいくつもの世界が広がつてゐるあれか？」

『そうじゅ、それにしてもお主よく知つてあるのー』

「よく読書するからそんな感じの読んだことあるんだよね」

『そいつが、なら話しが早いお主にはそこに行つてその外史を救つて
欲しいのじや』

「分かつた、とつあえずどんな外史に行くんだ?」

『それはの……三国志の世界じや』

「えつ? 危険真つ只中に行けと?」

『そこのでじや、お主には儂の願いを聞いてもらひにから三国世界
に行つても生き抜けるよう能力を授けようと思つての』
「それなら良かつた、行つていきなり死んだら洒落にならん…
所でそろ能力つてなんでもいいの?」

『まあ大抵の事なら構わぬよ、無理なものもあるのじやが』

「マジ? それじやあ
FaTeの全ての宝具でしょ~それとBLEACHの斬魄刀全てと
~NARUTOの世界に出てくる忍術全てで写輪眼とかのリスク無
しで後は刀語の完全系変体刀全てとオリジナル作成可能にして欲し
い」

『かなりのチートっぷりじやの…』

「まあこれでも漫好きですから一度はやつて見たいし、外史を救
うことはこれくらじしないと何かあつても困るし」

『それもむづいじやな』

「所でその三国志の世界はどんな感じなの?」

『つむ、それはじやな…………有名武将が全て女性じや』

「えつ……マジですか？」

『マジじや、まあお主なら何とかなるじや』

「頑張ります……それじゃ～しばりへ此処で修業していいですかね？」

『それくらい構わぬよ、お主はまだ16才くらいじやから2年くらで良いかの～？』

「うん、それくらいで良いかな。後流石に勉学は学びたいです」

『つむ、それくらい儂が教えよ』

「よろしくお願ひします」

2年後……

えつ早過ぎるつて？
気にしないでください

（笑）

「ふう～これくらいでいいかな～何とか能力使いこなしてきたし、知識も体鍛えたし頑張れるかな」『お主はやはりチートじや……たつた2年で全て扱える様になつたのじやからな。知識も天才の域を越えたしの～まあこれならあつちの世界に行つても大丈夫じや』

「それじゃ、そろそろ行きますか

《うむ、それでは頼んだぞ》

そしてまばゆい光に包まれ意識が沈んでいった

主人公設定（前書き）

こんな感じでいいかな〜？

主人公設定

名前 **暁紅**
アカウモナイ

容姿 るろ剣の抜刀斎の頃の感じ

身長 170?

体重 55kg

性格 温厚かつお節介焼き

身体能力

FaT eの全ての宝具使用可能

BLEACHの全ての斬魄刀使用可能

NARUTOの全ての忍術使用可能

写輪眼とかのリスク無し

刀語の完全系変体刀全て使用可能
オリジナル作成可能

全ての武器は王の財宝→ゲート・オブ・バビロンへに収納している

自分の意識で手元に出すことが可能

忍術は印無しで発現可能

修業によってオリジナル忍術が使用可能

完全系変体刀も12本の他、創り出した刀もある

2年の修業によりF a T e N A R U T O B L E A C H
能力は全て可能になつている

隨時出していきたいです

紅、大地に立つ（前書き）

やつと出来た…

なかなか文章は難しいです。

ひとまず紅の能力確認です。

では、どうぞ…

紅、大地に立つ

管轄によるある予言が三国に広がる

「天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流星は天の御遣いを乗せ、乱世を沈静す。一人は神々しい出で立ちをした者、もう一人は武と知が備わった強者が現る」

今の乱世にはこれ程とない天よりの予言

民たちは何時か現れるであるう一人の御遣いを待ち望んでいるのだ

それから数日……

此処はとある人里離れた森そこには一人の青年が倒れていた
そう……神様によつてこの世界を救つて欲しいと頼まれていた紅である。

「此処は……確かに光に包まれたぐらいは覚えてるんだけど……辺りを見れば森だらけ……つて事は三国の世界に着いたのかな」
「よし、取り合えず能力が発動するか確認するかな」來い『風死』
……よし出来た。ついでに解説してみるか……刈れ『風死』……さて少し鍛錬するか

そう言つて紅は『風死』を使い周りにある木々を切り倒していく……

「ふう～こんなとこかな～よし次は『火遁・頭刻苦』…………あ
つ…………やり過ぎた…………消さなきや…『水遁・爆水衝波』…
…何とか消えたよ……（辺りを見回し）考えて使わないと……」

「さてお次は『約束された勝利の剣』…わつ…本当に見えないや～
…じゃあ『千刀・ツルギ』…限定奥義・千刀巡り！…わあ～お
！？辺り一面刀だらけ……取り合えず一通り出来るみたいだな。」

そして全て王の財宝に戻した

「さて、能力の確認出来たし…そろそろこの外史の有名武将でも見
て廻るかな…取り合えず…魏の曹操、呉の孫策、蜀の劉備？まだ義
勇軍かな～後は洛陽の董卓か…よし行こう～」

「あつ…その前に森を元に戻さないと…『木遁秘術・樹界降誕』…
威力抑えめにしないと『テカすぎるからな…よし、これでよしと…』

辺りは先程までと違つて何も無かつたかの様に元の森に戻つた…

そしてそれを確認し紅は旅に出た…

紅、大地に立つ（後書き）

やつと物語が始まるかな？

取り合えずそれぞれの武将にあつてからにするかもです。

紅、無双し董卓軍に出来つ（前編）

やつと出来た……

無理くり詰め込みました……

戦闘描写がむずい……

駄文かもしだせません……

チートします！！！

フラグします！！！

それでせびりや……

紅、無双し董卓軍に出会い

「さて……どこから廻るかな」取り合えず【反董卓連合】が組まれるはずだから董卓が暴君なのかどうか確認が必要だな、本当にそういう倒さないといけないし、そうでなければ守らないと……」

「とにかく近くの村まで行つてみるかな」

それからじぱりくして……

「なんか知らんけど山賊ウザすぎね？」

歩いていく先々で襲つてくるし……たまに頭に黄色い布被つた奴らも居たな、まあほとんど返り討ちにしたさ……と言つてもただ『千刀・ツルギ』で千刀巡りを発動させて斬つて斬つて斬りまくつただけだし……十分チートだよ……んつ？なんか聞こえた気がするんするんだか……まあいいか……しまいにや……賊の一人に 剣鬼 つて二つ名付けられたし……

お気に入りの『千刀・ツルギ』使ってりやそつなるか……

それもそのはず紅は賊に会うたんびに『千刀・ツルギ』出して千刀巡りをしているから当たり前なのである……

紅がそう言つて落ち込んでいると村が見えてきた……

「おっ……村があるな少し寄つて情報収集でもするかな……」

そして村に入り……一人の村人と話す

「すいません。ちょっと聞きたいことがあるんだけど……いいかな?」

村人「んつ?……おお!旅のお方かい?
よく来たな……それで聞きたい事とは?」

「……」最近の噂かなんか聞かない?」

村人「噂か……そういうえば陳留の方の曹操つてに何でも天の御遣い
つてのが現れたらしいぞ……何でも神々しい姿らしい……」

「天の御遣いね!なんか胡散臭いな……しかも神々しいときたか?
まあおいおい確認するか……」

所で洛陽の董卓ってどんな人物だい?」

村人「董卓様かい?あの娘は優しい子だよ……洛陽の民達はとても親
しみを持っているらしいよ」

「そうなのかな?近くだし一度会いに行ってみるかな……どうもありが
とづ?……」

そして一息していると……

村人「賊が出たぞ!……」

村人「黄色い布を巻いてる奴らいるぞ!……」

それを聞いて…

「賊は何人くらいなんだ?」

村人「ありやゝざつと見ても五万はいるぞ……旅のお方…早く逃げなさい……」

「取り合えず洛陽の董卓にこの事を伝えろ…誰か助けに来てもうえ…それまで時間稼ぎしてやるから」

村人「えつ?たつた一人でか…死ぬ気か?」

「そんな分けないよ。これでも結構強い方でね…」

村人「分かつた……あまり無理するなよ…」

そして村の入口に立ち…

「うあ～壯觀だね～一面賊だらけだ…まあ時間稼ぎするとは言つたけど全部倒しても良いんだよな…」

「そうと決まれば今回は派手に『忍術』を打ち嗑ますかな～殆ど刀だけだつたし…たまにスッキリしないと…」

そして紅は賊達の前まで行く…

賊「なんだてめえは?」

「なんだと言われてもお前らを殺しに来たんだか？」

賊「はつ…たつた一人でこの数相手に出来るつてか?舐めてんじゃねえぞ!…」

「たつた五万だろ?そんなの俺にとっちゃたいしたことないんだよな…」

賊「ならやれるもんならやつてみやがれ!…」

「やれやれ…そんじゃ行きますか…『風遁・真空連波』…」

紅の口から複数の力マイタチが吹き出される…

ズバツ…ズバツ…ズバツ…

賊達は次々と斬られていく…

ギヤア…

賊「何が起きたんだ!…」

「ボケツとしてると死ぬぞ…『火遁・霞炎舞の術』…」

今度は口から霧状の物質を吐き火を噴いて一気に火の海に変える

ボオー————ツ

賊「ギヤア————」

「まだまだ」『水遁・破奔流』…

紅の掌に水の渦を作り広範囲に及ぶ巨大な水の竜巻を出現させ目的を巻き上げていく…

「オ————ツ

賊「妖術使いだ〜逃げろ〜〜〜！」

「妖術じゃないって…忍術だって…さてそろそろ終わらすか…水を浴びてるお前らは一瞬だ…『雷遁・偽暗』…」

両手から雷を高速で飛ばす…

ピカツ…「オ————ーン

一瞬眩しい閃光になり収まると五万もいた賊が殆ど生き絶えていたのだ…

「ふう〜片付いた…後で埋めないとな…」

紅がそんな事を言つてると前方から【張】と【呂】と【陳】と【華】の旗が見えた…

「おつ…援軍が来たのかな？張遼に呂布と陳宮、華雄か…有名武将が四人も…しかも本当に女の子だよ…」

紅に近付いて来て

張遼「こここの村に賊が来おつたて聞いたんやけど…なんや斤付いとるな～あんたがやつたんか?」

「そりだけど…」

陳宮「嘘をつくなです…たつた一人で五万も倒せるなんて出来るはずないです…」

華雄「確かにそうだな…恋ならともかくお前見たいな奴が倒せるはずがない…」

「いや… そう言われても実際倒したんだが…」

呂布「…………」

陳宮「なんですとー? 恋殿より強いはずないです… 恋殿が一番強いに決まつていいのです」

張遼「あの恋が言つてるんやからそりなんやろ?」

華雄「まあ… 霊もやう靈ひなうらそりなんやうな…」

「なああんた達がさつきから呼んでる名前は何なんだ? そつちの赤い髪の子は呂布だろ? それに袴着てるあんたは張遼だろ?」

張遼「なんやあんた真名知らんのかいな?」

「真名? 聞いたことないな… 今まで殆ど一人で旅をしていたしな…」

張遼「そりなんか… 真名つて言つのなあその人の本当の名前で親と

か自分が認めた奴以外その名を呼ぶと首斬られるんや

「神聖な名前って事ね……氣をつけないと……」

張遼「まあそいつ鹽つひひかや……そつこえればあんたの名前なんて鹽つん?」

「俺は紅だ……たまに 剣鬼 とも呼ばれてるな……」

四人「……！」

「どうしたんだ?」

張遼「…… 剣鬼 つてあの 剑鬼 かいな? しかも真名まで……」

華雄「真名は神聖なものなのだが…… しかもこんな奴があの 剑鬼 とはな……」

陳宮「たしか賊共は 剑鬼 に出会つたら逃げろと言つてはいたのです！」

「まあ、そう呼ばれてるみたいだな……

確かに 剑鬼 とは俺のことだ…… 勝手に付けられたんだが…… まあ 紅つてのが真名になるのかな? 気にしないよ」

呂布「………… 恋」

「んつ? それって真名だろ? いいのか?」

呂布「……紅……いい人……それに強い……恋……闘つてみたい……」

「そつか~俺も賊を三万人たつた一人で倒したその力に興味あるしな…

それじやあよろしくな……恋」二「

恋「(ポツ)……んつ……よろしく……」

陳宮「……恋殿ずる」のです……ちときゅーも紹介するのです
/ / /

姓は陳、名は宮、字は公台……真名は音々音なのです……音々と呼
ぶといいのです……」

張遼「……ならうちもやな……」

姓は張、名は遼、字は文遠……真名は靈や……よろしくつな~……」

華雄「……私は姓は華、名は雄だ……字は無い……真名は訳があつて
言えないのだ……済まない……」

「なに気にするな、よろしくな……音々音、靈、華雄」

なんと紅には二「」が備わっていた!!

「そつだ! 恋達の主に会いたいだがいいかな?」

霞「そやな……あの 剣鬼 が来たつて聞いたら思つちびつつくする
やうな~」

華雄「ならば戻るとするか……我が主の元へ……」

「その前に倒した賊を片付けたいんだけどいいかな？」

音々「片付けるついでにやるのですか？」

「まあ～見てなつて…『土遁・土流割』…」

ド「オ――ン

賊共の亡き骸が在った場所の大地が真つ一いつに割れ地中へと飲み込まれていく…

四人「…………」

「ふう～これでよしつと……びっくりした？」

霞「何なん今の？いきなり大地が真つ一いつに割れよつたで？」

「今のは『土遁』つて言つんだ…土を操るからね…他にも色々あるよ…それをすべて『忍術』つて呼んでるんだ」

華雄「『忍…術』…？ 妖術使いみたいなものか？」

「いやちで言つ『仙術』かな？」

音々「おお～凄いのです…！」

恋「紅…カツコイイ…//」

「まつ…せつかく仲良くなれたんだし… 主の所に行つたら色々見せるよ」

霞「約束やで～ついでこいつとも勝負な～」

華雄「なら是非…私とも闘つてもいい…」

恋「…ダメ…恋が…先…」

音々「音々は見学なのです…」

「ああ～わかった…それじゃあ行こうか」

やつして紅は董卓の元へと歩んで行くのである…

紅、無双し董卓軍に出会つ（後董を）

次は董卓に会いに行くかもす…

フラグ出るか！…！

チートするのか！…！

お楽しみに…

出来ました……

フワグ立ちますか？

では、どうぞ……

董卓に会って、紅は赤ゆきと誓つ

「此処が洛陽か……いい町だな～」

霞「そやか～なんと言つても、用やからな～」

華雄「そつだぞ……董卓様は民達一人一人の事を大切にされてゐるからな……」

音々「音々も用殿ために頑張つてゐるのです……」

恋「……用はいい子……恋が守る……」

「うそ……董卓はいい家臣に恵まれてゐるな～」

紅はそつとこながら音々の頭を撫でてあげるのだった……

音々「……恥ずかしいのです……でもなんか気持ちいいのです……」

音々はうつとうじてしまつた……

恋「……恋にもして……」

霞「うちにもして～な～」

華雄「私は別に……だが……してもいいぞ……」

「わかつた……わかつた……しょうがないな～」

そして三人を順番に頭を撫でる。.

ナトナト.....ナトナト

「//なんや...これ癖になるわ~//」

華雄

「喜んで貰えて何よりだよ～せで……そりゃあ董卓に会って行こう

もう暫く紅葉の季節を離す

音々「もつと撫でて欲しいのです……」

恋「紅」もつと「」

霞「な~もひよ~ヒ~せん~」

華雄一 もう少し撫でて貰えないだらうか////「

一 また今度な

霞一しゃうないほな行こうか

そして城に向かう…

霞「やひ……着いたで～～」

「ひま～～～ひ……でつかにな～～」

華雄「なんだ初めて見るのか……」

「やつやね……殆ど野宿か村ぐらこしか行つてないしな……」

音々「野宿なのですか！？」

「野宿と言つても、術を使つて家作つてゐしな……」

霞「ほえ～～なんか便利なんやな～～」

恋「……恋……見てみたい……」

「ん～～此処じや出来ないからな～～」

恋「（シコン）……残念……」

「今度見せるよ……」

恋「……わかつた……約束……」

華雄「飯とかはざひしていたんだ？」

「ああ～それなら……（紅は空間から肉まんを取り出す）……つて
具合に食事には困らなかつたんだ……」

恋以外「…………」

恋「…………肉まん…………おこしわらひ…………（ジユル）」

霞「今……どひから取り出したん…………？」

華雄「一体……どひから…………？」

音々「それも忍…術と書ひものなのですか？」

「おこしわらひ…………説明するよ…………恋…………食べるか…………？」

恋「（口ク口ク）」

ハムハム……「キュー」…

「（なにこの可愛い生き物…………）…………恋もつと食べるか？」

そつ言つて紅は10個くらひ肉まんを空間から取り出した…

恋「（口ク口ク口ク口ク）」

ハムハム……ハムハム……ハムハム……「キュー」…

霞「恋は相変わらずの食つぱつやな～」

華雄「見ていろ」ひしがお腹一杯になりそつだ…」

音々「恋殿～～」

「後で一杯あげるから……そろそろな？」

恋「…………んっ」

そして謁見の間の扉前……

霞「それじゃ……紅は此処で待つとつてな」

華雄「村の賊の報告とかの後で紹介するのでな……」

「わかつたよ……待つてる」

霞「用～～詠～～戻つたで～」

華雄「董卓様ただ今戻りました……」

恋「ただいま……」

音々「ただいまなのです」

賈駆「……あんた達……大丈夫だったのー?」

董卓「へう～～心配してました～～」

霞「ああ～～それな……つちらが着いた時にはもう『付いとつたんや……』

賈駆「嘘！？……だつて五万も居たのよ！！」

華雄「嘘ではない……本当だ……私達が着いた時にはたつた一人の青年によつて壊滅されていたのだ……」

董卓「一人つて本当なんですか？」

霞「そやで～会つてみるか？一人ともびっくりするで？」

賈駆「えつ！～来てるの？」

華雄「ああ……話し込んでいるつちに董卓様に会つて見たいと言つてたのでな」

董卓「私に……ですか？」

霞「紅づく入つていいで～」

そして扉が開き……

「お邪魔しま～す」

賈駆「ちよつとあんた！～五万の賊を一人で倒したつて本当なの？」

「おお～～きなりだな……たしかに……一人で倒したぞ……所でん

たは？」

賈駆「嘘はついてなれどつね……私は賈駆……字は文和」

「あなたが賈駆か……つて事は隣の子が……」

董卓「私が董卓です……字は仲穎と言います」

「（「）の子があの暴君！？そつは見えないな……）そつか……君が董卓か……俺は紅だ……賊からは 剣鬼 つて呼ばれてる……」

「一人「……」

賈駆「 剣鬼 つて言つから怖い人かと思つていました……
言つ……」

董卓「 剣鬼 つて言つから怖い人かと思つていました……

「まあ……襲われたりしたら返り討ちしてたらそつなつた……」

賈駆「それなら納得するわ……一人で倒せるわね……」

董卓「村を守つてくれてありがとうございます」

「なに……礼を言われることじゃなこさ……俺が助けたいと思つただけだ……」

董卓「それでもです……ありがとうございます」

賈駆「そうよ……私からも言つわ……ありがとうございます」

「（たしかに慕われるな…おつてあげたい…）」

董卓「よかつたら真名を受けとつて貰えますか？」

賈駆「そうね…あんたなら真名を預けてもいいかも」

「おいおい…いいのか…真名は神聖なんだろ?」

霞「月が言つてるやから…受けとつたり~な」

音々「そつなのです!詠殿も預けると言つことは認められているのです!~」

「わかつた…有り難く受け取るよ」

董卓「私は月と言こます」

賈駆「私は詠よ」

「ひからいよろしくな…月、詠…俺の事は紅でこよ」二口シ

二人「／＼／＼／＼／＼…」

霞「あ~~一人ともやられたな…／＼／」

華雄「そつみたいだな／＼／」

音々「あの笑顔はドキッとするのです／＼／」

恋「……紅……／／／」

「それじゃへじぱりへ密将として置いてくれないか？」

月「へう～～よろしくお願ひします／／／」

詠「わ…私からもお願ひするわ／／／」

紅はしばりへ密将とのるのである……

董卓に会い、紅は赤ゆき誓つ（後書き）

次は約束していた恋達との模擬戦にしたいと思ひます...

戦闘描写難しかもされませんが...

オリジナル武将もだそがなつて思ひてます。

紅、武を見やうつかも洛陽の民に慕われる

【前編】(前書き)

書いてたら文字数足りなくなつたので分けます…

オリキャラ登場します

ではどうぞ…

紅、武を見せつけしかも洛陽の民に慕われる

【前編】

「さて……恋、霞、華雄……模擬戦しようか……」

恋「んつ……わかつた……」

霞「おつ……待つてました～～」

華雄「ふむ、楽しみだな……」

音々「音々は見学するのです」

詠「ちよつと……あんた達……城を壊す氣なの……」

「ああ～大丈夫、大丈夫……俺なら直せるから」

詠「直せるつてどうやって？」

「まあ見てたらわかるよ」

月「詠ひやん……とにかく見に行つてみよ」

詠「月～～～もつ……わかつたわよ……」

そして演習場に向かひ……

「さて……誰からにするへ……」

華雄「私から行かせてもらおうか……」

華雄は金剛爆斧を持ちながら構える……

「最初は華雄か……（力タイプつぱいな）じゃあ……来い『絶刀・鉋

…

一本の刀が現れる…

華雄「それも紅の力なのか?」

「ああ……俺には『王の財宝』つてのがあってそこに幾つ物武器がしまつてあるんだ……まあ殆ど見えない空間にあるからね……それに食料も保存出来るよ、腐らないから便利なんだ……」

霞「だからあんな沢山……肉まん出てきたんか~」

恋「紅……肉まん……食べたい……（ジユル）」

「あ~恋……模擬戦の後沢山食べさせてあげるから

恋「わかつた…」

「よし……それじゃあ……始めようか…」

霞「ほないくで……両者……構えつ……始めーーー！」

華雄「うおおおおおおつ！」

華雄は物凄い勢いで金剛爆斧を振りかぶり一気に振り下ろす……

ガキン……

「さすが華雄だね……凄い力だ……」

紅は『絶刀・鉋』でそれを防ぐ

華雄「なに……たかが細い刀で私の一撃を防いだと……」

「この『絶刀・鉋』は頑丈さに主眼を置いててね……決して折れも曲がりもしない……次はこちらから行く……」

紅は斬撃と突きで華雄を翻弄していく

詠「凄い……あの華雄が一方的に押されてるなんて……」

霞「ほんまやで……あの斬撃と突きの速さ尋常じやないで……」

恋「紅……やつぱり強い……楽しみ……」

音々「恋殿が喜んでるのです!」

ザンツ……ザンツ……シユツ……シユツ……

ガキン……ガキン……ガツ……ガツ……

華雄「くつ……防御するだけで手一杯だ……」

「さて……そろそろ終わりにするかな……行くぞ……限定奥義「報復絶

刀

紅は荒い突きを仕掛ける……

ガキン

華雄 - しまつた ･･ ！ ！

華雄の斧が手から離れ無防備になり
紅は空中へ大跳躍し……

トノシ

袈裟掛け斬りを仕掛ける

「てえりやあああああ」

正月一
丁巳

当たり一面に砂埃が舞う

霞「ケホッケホッ……どうなつたんや……」

砂埃が晴れそこにあつたものは

華雄の鎖骨辺りで刀を寸止めしている紅の姿があつた……

華雄「…………さすがだな…………」

「いやいや…華雄もたいしたもんだよ…俺のあれだけの突きに対処出来るんだしこれからも伸びるよ…」

華雄「そうか……ありがとう……」「う

華雄は気が抜けたのか紅の方に倒れ込んだ……

「おっと……お疲れさん」

霞「勝者……紅——！」

《詩經》

いつの間にかギャラリーが増えていた……

「うおっ……びっくりした……いつの間に集まつたんだ？さて……華雄を休ませないと……」

そう言つて紅は華雄をお姫様抱つこするのである……

「おお～うぬ二ド～～ウルモント～～」

恋「する」……恋も……」

音々「する」ですぞ……ねねにもかねのです。」

詠「なつ！－何してんのあんたは－！」／／／「

月「へうう～～」/ / /

「いや……何をつて……華雄を休ませないと……」

近くの井戸へと寝かせる……

「わい……次は霞かな……」

霞「みーしゃー……ひもお姫様抱つこしてもひつでーー。」

「いや……負ける前提をされても困るんだが……まあ……その時はするよ」

一呼吸置き……

「わい……やひつか……」

霞「神速の張遼の腕前を見せたるでー」

「（霞はスピードタイプか……）……来い『神槍』……さうに解号……射殺せ『神槍』……」

一本の脇差しが現れる……

霞「なんや……短い刀やな……そんなんでつけて勝てると思つてるん？。」

詠「まあ……見てなつて……詠……頼む……」

詠「わかつたわ……両者構え……始め……」

霞「先手必勝やつ……」

霞は飛龍偃月刀を物凄い速さで斬撃を放つ……

ザンツ … ザンツ … ザンツ … ザンツ …

しかし紅は紙一重でぼぼ回避する。

「さすが……神速なだけあるな……す」「いや」

霞「それを余裕でかわしてゐる紅の方がすげ〜」こんやけど……なんか落ち込むで……

霞「でも…紅に褒められるんは嬉しいわ//」
「…いやいや…十分過すぎるほど速いよ…俺が特殊なだけだな」

紅は『神槍』を胸の前で構える。

——
舞 蹤
——

ビュンヂ

霞「なつ……でも……」

霞はいきなり伸びてきた『神槍』に驚いたが瞬時にかわす……

「流石だね……これならどうかな……」舞踏連刃

休む間もなく『神槍』が伸びてくぬ…

霞「くつ……一瞬でも気抜いたら……やられてまつ……」

「流石……神速の張遼なだけはあるよ……かすりもしないんだもん……」

霞「ハアツ……ハアツ……ハアツ……」これでも……結構……あつこんやけど……

…

「霞に」れじや勝てないか……來い『斬刀・鈍』…

紅は『神槍』を消しすべてが真つ黒な刀を出した…

霞「紅はほんとおもろこやつちや……武器が色々出て……」

「でもこれで終わりだよ……一瞬で……零閃……」

シャリンッ…

霞の間合に一瞬で入り峰で居合にする…

霞「くつ……」

ドサッ…

月「霞さんー?」

音々「霞殿ー?」

「大丈夫だよ……峰打ちだから」

詠「……勝者……紅……」

《つおおおおおおつ》

《すげえええつ》

「さて……約束通り運びますか……」

紅は霞をお姫様抱つて運ぶ……

その途中……

霞「んつ……」

「おつ……田を覚ましたかい?」

霞「紅に運ばれてるって事は負けたんやな……やっぱ……凄いわ……」

「霞も鍛えれば大丈夫だよ」

「そつか……なかなかええもんやね……これ……」

「喜んで貰えて何より……」

そして華雄の隣に降ろす……

霞「あんがとわん……」

華雄「んつ……」

霞「おつ……華雄……覚めたんか?」

華雄「ああ……確かに負けた所までは覚えているのだが……」

霞「あの後、倒れて紅にお姫様だつこされたんやで?」ひひやましかつたで、まあ、うちも負けて運んでもらうたけど――」

華雄「なつ――（覚えてないのが悔しい……）」

「華雄も霞もゆつくりしてなよ……最後の試合するからや……」

華雄「わかつた……次の一戦は見物だからな……紅……後で話があるんだがいいいか?」

「ああ……構わないよ」

霞「（華雄もとつといつぱつんか……）いつも恋との試合が一番楽しみにしてたんや」

「じやあ……」期待に応えないとね……」

紅は恋の居る方へ歩いて行く……

恋「紅……早く……」

音々「恋殿～頑張つてくだされ～」

「さて……恋を相手には最初から全開で行かないとな……」

恋「恋も…本氣で行く…」

両者から物凄い鬪気が溢れ出る……

ゴホ～～～～ツ

華雄はな 一イチ ッツ これがカ 一人ヒト の本ハ 氣キ なカ のカ かカ 「

霞
シ
テ
キ
ミ
ス
ル
事
の
遷
化
と
體
質
の
變
化
」

「…恋戯…裸じゃ…なのです…」

用一

「……………ッ…ちょーど…!! あんた達周りを考えなやー!!」

そして一人の前にある武将が立つ……

? 「あぶないで」
「やるな」

? 「まつたくだ一人にはきついぞ…」

「あひ…『じめん』『じめん』 恋と戦ふと黙りつゝ……………ねー?」

紅は月と詠の前に立つてゐる武将を見て驚く：

そこには長身で腰まであるう緑色の髪をポニー・テールにしている糸田の女性と長身で褐色肌の黒髪にこれまで腰まで伸びている女性が

居た……

「（なんで……ネギ魔キャラが居るの……？……俺が介入してるからか？）
……所で君達は？」

？「某は高順で」「やるよ……がは無いで」「やる」

？「私は徐晃……字は公明だよ」

氣を取り直して……

「高順に徐晃か……君達も強そうだ……」

高順「やめとくで」「やるよ……」

徐晃「私もだ……勝てる氣がしないよ……」

「やつか……残念……でもたまに鍛練の相手してね」二三ツ

高順「……」

徐晃「……」れはまた……「……」

「さで……恋……始めようか……」

恋「うん……」

詠「じやあこくわよ……両者構え……始め……」

恋は方天画戟を振り抜く…

「オ～～～～と風が吹き荒れる…

紅はそれを避ける…

「さすが天下無敵の呂布だな…（恋は万能タイプか…）…じゃあ…
次はこっちから…『斬月』…」

紅は『斬月』で物凄い速さの斬撃を繰り出す…

ザンッ…ザンッ…ザンッ…ザンッ…ザンッ…ザンッ…

恋はそれを軽々と避ける…

恋「紅も…強い…恋…楽しい…」

そいつ言つて方天画戟を次々と振り抜く…

ブォン…ブォン…ブォン…ブォン…ブォン…ブォン

紅も軽々と避ける…

周りがボロボロになつていく…

「これ以上は城が壊れるから一気に決めようか?」

恋「うん…行く…」

「…正解『天鎖斬月』…」

そして二人は交差する…

ドサッ…

そこには立っていたのは紅だった…

詠「…………ハツ！…勝者…紅」

《うおおおおおつ》

《呂布に勝つたぞ～》

「恋…大丈夫か？」

恋「大丈夫…紅…楽しかった…運んで／＼／＼

「俺も楽しかったよ」

辺りを見回し…

「さて…直しますか…」

紅はそう言つて恋をお姫様抱つこで華雄と靈の側に運んで降りる…

「まあ～見てなつて……『土遁・地動核』……」

ボコッ…ボコッ…ボコッ

すると先程までボロボロだつた演習場が元に戻る…

詠「あんたは一体…」

月「もしかして紅さんは…天の御遣い様ですか？」

全員「…………！」

続く…

紅、武を見やつししかも洛陽の民に慕われる

【前編】（後書き）

次で董卓編を終わりして次の場所に行こうかと考えてます…

紅、武を見せつけしかも洛陽の民に慕われる【後編】（前書き）

何とか出来ました…

それでは…どうぞ…

紅、武を見せつしかも洛陽の民に慕われる【後編】

「天の御遣いって一人じゃないの？陳留に現れたって聞いたことがあるんだけど…」

月「天の御遣いは一人いるんです…一人は神々しい姿をした者…もう一人は武と知を備えた強者…」

「つてことは…その武と知を備えた強者が俺だと…」

華雄「それなら納得だな」

靈「そやね…ついに勝つんやから」

恋「紅…恋よ…強…」

音々「紅は天の御遣いなのです」

詠「あの三人に勝つんだから納得よね…」

高順「天の御遣いでござるか」

徐晃「納得せざるおえないね」

「皆が言つながらさかもね…月を守るなら…つてつけの肩書だ…」

詠「月を守るつて…あんた…なんか起きるつて知つてゐの…」

「さうだな…皆には話しておこつか…まずは城に戻るつ…」

そして謁見の間……

「あい……詠は【反董卓連合】と聞いていた通りかへ。」

全員「…………」

詠「……月に何か起きたのね……」

「ああ……まず今起きてる黄色い布を着けた奴ら……黄巾党の件が片付いたら靈帝は崩御する……その後、十常侍にいじめつに利用され洛陽に圧政を引き連れて尊を立てられ袁紹と袁術の名聲の為……討伐されり……」

月「そ……そんナ……」

詠「靈帝が崩御するだけじゃなく……月にそんな事が起きるなんて……」

霞「紅……何とかならへんのか?」

華雄「そうだ……月様を守る方法は無いのか?」

恋「月はいい子……恋……絶対守る」

音々「やつですべーーー。」

高順「やつでいいやつなんとかならんやつやんか?」

徐晃「そりだね…守れるなら守りたい…」

「俺はそれを防ぐために此処に来たかったんだ…最初は知っている通りの人物なら始末する気だつた…」

全員「えつ…………！」

「安心して…月に会つたらそんなこと思わなくなつたから」

全員がホッとする…

霞「勘弁して欲しいわ～勝てへんも…」

華雄「そりだな…霞と恋の三人掛かりでも無理だろ?な…」

恋「紅と戦いたくない…」

「そこ」でだ…皆を死なせたくないからある程度…洛陽を良い政策をして豊かにする…そして皆を鍛える…」

月「どうして…そこまでしてくれんですか…？」

「どうしてつて…守りたい事に理由なんていらないから…俺が守りたいそれで十分だよ…」二口ッ

全員「…………！」

月「ぐう～～ありがとうございます／＼／＼

詠「ボクからもお礼を言つわ…ありがとう／＼」

霞「その笑顔は反則や…／＼」

恋「紅…／＼（ポツ）」

音々「そつなのです／＼」

高順「反則で、」（れぬよ／＼）

徐晃「反則だねえ／＼」

「そりだ！！華雄…なんか話あるんじやなかつた？」

華雄「……ハツ！／＼… そうだつた／＼… 実は紅に真名を預けようと思つてな／＼」

「えつ…なんか言えない訳があつたんじやないのか？」

華雄「実は…私は真名を伝える相手は伴侶になる相手と決めていたのだ／＼」

「今…なんと…？」

華雄「だから…伴侶になる相手と…何度も言わせないでくれ／＼」

「……そつなのか／＼」

華雄「預かつてくれるか……？」

「わかつた……剣鬼 と言われてるこんな俺でも良かつたら……」

華雄「ありがと……／＼私の真名は椿だ……／＼」

霞「やつぱり好きやつたんか……つむりも紅の事好きなんよ……」

恋「恋も……紅……好き……」

音々「ねねも好きですぞ……」

月「へう～～私も好きになつてしまつました……」

詠「月も！？……ボクも好きになつちゃつた……」

高順「某も惚れてしまつたで！」れるよ／＼真名は楓で！「れる／＼」

徐晃「私もだ……／＼一田惚れつてのはあるもんだね……／＼真名は百合だ……」

「みんな……ありがと……」

そして数週間経つていく……

その間、紅は賊の退治や政務、武将達の鍛練をして、洛陽の民達との交流を深めていった……

その結果…

紅には新しい一つ名が出来た… 天の術神 … 五大忍術を使つたりしたから当然である… 賊に雷遁を使い「天の裁きだ～」とか… 土遁や水遁、火遁、木遁など使い「神の怒りだ～」と言わされたからである…

武将達は恋に匹敵する程までいかなくとも強くなり… 軍師組もかなり鍛えられた… さらに紅との間も深まつた…

民達からは毎日と言つていい程… 料理や贈り物など貢つた… その度に 王の財宝 にしまうのである…

子供達からの遊びにも付き合つたりした…

そして…

「皆に伝えたい事がある… そろそろ旅を再開しようと思つ…」

全員「えつーー！」

「ちゃんとした理由があるんだ… もしもの為に月達の匿える場所を探そうと思つてね… それで他の場所に居る有名な武将を見に行こうと考へて…」

詠「それって誰なの…？」

「とりあえず気になるのが呂の孫策と… 後は幽洲の公孫贊の所に居る義勇軍の劉備かな… 陳留の曹操は天の御遣いが居るけど… どんな

もんか確認しに行くかも…」

月「わかりました…でも…『氣をつけて下さいね』

「大丈夫…ちゃんと会いに来るよ…一応此処の場所に術式掛けておいたから…何時でも来れるよ…」

霞「忍術やな…！」

椿「それなら寂しい想いをしなくて済むな…」

恋「恋…待つてる…」

音々「ねねも恋殿と待つてるのです…！」

楓「某も寂しいのは勘弁で、『それからな…』

百合「ああ…待つのは辛いからね…」

詠「ボクも月と一緒に待つてるから…」

「俺は幸せ者だね〜こんなに沢山の嫁さんが居るんだから〜〜〜

全員「〜〜〜〜〜」

「それじゃあ…行くよ…詠…十常侍には『氣をつけてな…』

詠「わかつた…氣をつけなさいよ…皆…あんたの事…心配なんだから〜〜〜」

「わかった……ありがとう……」

そつぱつて紅は眩に接吻をするのであった……

そして……城を出る……

「さて……とりあえず……劉備の所に行つてみるか……『忍法・超獣偽画』

……」

紅は墨の鳥に乗り劉備の元へと向かう……

紅、武を見せつてしまふ洛陽の民に慕われる【後編】（後書き）

次は劉備の所です…

頑張りますーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3916y/>

恋姫物語～神に恵まれし者～

2011年11月19日22時58分発行